

## ヨハネ福音書の第一過越物語（2-4章）の 集中構造的解釈

宮崎 譽

### 序文

この論文は、ヨハネによる福音書の第一過越物語(2-4章)を文学的な集中構造(Chiasm, Chiasmus)の視点で解釈する試みである。この取り組みを通して、歴史的批評学によって断片化されて解釈されてきた3章16-36節のテキストの統合性を明らかにしたい。歴史的批評学では近似する二つの神学的ナレーション(3:16-21、3:31-36)が分かれて配置されていることが問題視されてきたが、集中構造的視点により、その配置が文学的な技法であることを論じる。そのために、まず第一章として、課題とされる歴史的批評学によるテキストを断片化する解釈を紹介し、第二章に集中構造とその判断基準を論じ、第三章にヨハネ福音書の第一過越物語(2章-4章)のマクロ集中構造を明らかにする。第四章では、第一過越物語の集中構造的解釈を持つ神学的・倫理的意義を描写する。

### I 歴史的批評学によるヨハネ福音書3章の諸解釈

第四福音書3章16-21節と3章31-36節の二つのナレーションは、歴史的批評学の研究の対象とされてきた。どちらも対話調の物語(イエスとニコデモの対話、洗礼者ヨハネと彼の弟子の対話)から突如、まとまった神学的主張を持つナレーションに文体が変わる。さらに、この二つのナレーションが主張する神学は近似している。それ故に、歴史的批評学では、3章16-21節と3章31-36節の二つのユニットが、編集によって不自然に分断されたといういくつかの仮

説が立てられてきた。

ルドルフ・ブルトマンの仮説によると、3章31-36節のナレーションは本来3章21節の後に置かれており、イエスの対話の結論という役割を持っていたとされる。間にあるユニット(3:22-30)は結論の付録として付加されたものと理解される<sup>1</sup>。ルドルフ・シュナッケンブルグの仮説では、ニコデモとの対話は、イエスがニコデモの不信仰を非難する3章12節で終わり、洗礼者ヨハネの物語の記事(3:22-30)は、その直ぐ後に続いていたが、第四福音書の記者がイエスのメッセージの要約をケリグマ対話として、正しい順序ではないところに挿入したと解釈した<sup>2</sup>。レイモンド・ブラウンの理解によると、3章31-36節の物語は元々3章11-21節とは独立したイエスの言葉の記録であり、それが誤って洗礼者ヨハネに帰せられたとする<sup>3</sup>。エルゲン・ベッカーの視点では、3章1-21節をヨハネ学派における議論の結果の塊であり、3章31-36節はニコデモとの対話の補足的な注解とされる。3章31-36節は、写本の筆記者によって誤った場所に置かれてしまったという仮説が立てられた<sup>4</sup>。

このように、歴史的批評学では、近似する神学的主張を持つナレーションが、二つに分かれて配置されていることを聖書テキストの編集上の問題とし、その理由となる様々な仮説を立ててきた<sup>5</sup>。しかしながら、本論文ではこれらの文

<sup>1</sup> Rudolf Bultmann, *The Gospel of John: A Commentary*. (Philadelphia: Westminster, 1971), 131-132; David Rensberger, *Johannine Faith and Liberating Community* (Philadelphia, PA: The Westminster Press, 1988), 53.

<sup>2</sup> Rudolf Schnackenberg, *Gospel According to St. John*. (New York: Crossroad Publishing Co., 1982) 1:361-362; Rensberger, *Johannine*, 53.

<sup>3</sup> Raymond Brown, *The Gospel according to John (i-xi) The Anchor Bible* (Garden City, NY: Doubleday & Company, Inc., 1966) xxxvii; 160; Rensberger, *Johannine*, 53.

<sup>4</sup> Jürgen Becker, "J 3, 1-21 als Reflex Johanneischer Schuldiskussion," in *Das Wort und die Wörter* (ed. Horst Balz and Siegfried Schulz) 93-94; Rensberger, *Johannine*, 53.

<sup>5</sup> 他方、これらのテキストを統合的に解釈する試みもある。C・K・バレットとエルンスト・ヘンヒェンは、現在の聖書テキストの形状の順序のままテキストを解釈している。C. K. Barrett, *Gospel According to St. John*, 2<sup>nd</sup> ed. (Philadelphia: Westminster Press, 1978), 219; and Ernst Haenchen, *John: A Commentary on the Gospel of John*. Hermeia (Philadelphia: Fortress Press, 1984), 1:209-210;

章ユニットの位置を誤った配置として見るのではなく、マクロ集中構造として配置されており、むしろ、その配置が福音を効果的に証していることを明らかにする。

## II 集中構造とその基準

### 1) 集中構造の定義

メアリー・シュルトとペリー・ヨーダーは「どのように (How) 言われているかとは、何が (What) 言われているかの一部である<sup>6</sup>。」と語り、聖書テキストの内容と共に、テキストの形状も解釈する上で意味をなすとみる。この主張は、並行法や集中構造に注目するときにも重要な視点を提供する。並行法は言葉や概念において応答するフレーズ、文節、物語ユニットの要素から成立する。並行するものは、意味論、文法、構文法など、様々なレベルで起こる<sup>7</sup>。一つの種類の並行法として集中構造がある。近代の集中構造研究の父と呼ばれるニルス・W・ルンドは、集中構造を以下のように定義している。「ギリシャ語の起源からすると、この [集中構造という] 用語は文学的形状や前提を意味する。それは「交差するように配置された」文章内の言葉である。この用語はレトリックの一部として、文章の中で繰り返される言葉や、続いて現れる言葉の順序の入れ替えを意味する用語として用いられる」<sup>8</sup>。ギリシャ語の文字「X」が交差

Rensberger, *Johannine*, 54.

デイヴィッド・レンズバガーも3章全体を統合的に見て、3章の描写はヨハネ共同体にニコデモグループと洗礼者ヨハネの弟子たちとの間に緊張関係があった証であると理解している。Rensberger, *Johannine*, 54-57.

C・H・ドットは3章をひとつの思想ユニットとして把握して、「キリスト者の水と霊による洗礼の用法」と「水のみを用いる洗礼者ヨハネ」の間にある神学的な対照を洞察し、主題の連続性を明らかにしている。C. H. Dodd, *Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1953), 309-311; Rensberger, *Johannine*, 54.

<sup>6</sup> Mary H. Schertz, and Perry B. Yoder, *Seeing the Text: Exegesis for Students of Greek and Hebrew* (Nashville: Abingdon Press, 2001), 10.

<sup>7</sup> Ibid., 47-50.

<sup>8</sup> N. W. Lund, *Chiasmus in the New Testament* (Chapel Hill: University of North



の形をとっていることから「chiasm、集中構造、交差型並行法」等と呼ばれている。

集中構造は言葉単位でなされるマイクロ集中構造と、大きく物語ユニットでなされるマクロ集中構造とがある。下のサンプルは、マイクロ集中構造の例である。言葉や概念の順序が、中心軸を起点に転換し逆の順序に配置されている。

マタイによる福音書 6章 34節

A. μὴ οὖν μεριμνήσητε εἰς τὴν αὔριον, (34節 a)

A'. ἢ γὰρ αὔριον μεριμνήσει ἑαυτῆς (34節 b)

訳) A. それゆえに、明日のことまで思い悩むな。

A'. 明日のことを、明日自らが悩むから。

このような転換表現により、テキストの持つメッセージが先鋭化されるのである<sup>9</sup>。このような例は数多くあり、更に広いテキストを扱う集中構造もある<sup>10</sup>。

## 2) ミクロ集中構造とマクロ集中構造の基準

Carolina Press, 1942), 31. ブラウワーはこう語る「集中構造とは軸の中心概念をめぐって廻回する言葉と表現と主題のバランスをとる用法であり、はじめの半分の順序に対して後半の半分に、言葉と表現と主題の順序が入れ替わるものである。」 Wayne Brouwer, *The Literary Development of John 13-17: A Chiasmic Reading* (Atlanta, Georgia: The Society of Biblical Literature, 2000), 2-3.

<sup>9</sup> 教段に渡るマイクロ集中構造の例 (ヨハネによる福音書 6章 19-21節)。

A They saw Jesus walking on the sea and coming near the boat, (19b)

B They were terrified. (19c)

C But he said to them, "I AM. (20a)

B' Do not be afraid." (20b)

A' They wanted to take him (Jesus) into the boat, (21a)

<sup>10</sup> Ian H. Thomson, *Chiasmus in the Pauline Letters* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995), 27-28. 例、エフェソ人への手紙 1章 4-10節の集中構造。

集中構造や並行法は聖書研究に有効であるが、研究者たちによる曖昧で疑わしい「集中構造っぽい (Chiasm-like) ものが多く提案されて課題となっている<sup>11</sup>。例えば、ピーター・エリスは第四福音書全体に渡るマイクロ集中構造の研究を発表しているが<sup>12</sup>、多くの研究者がその主張の判断基準の曖昧さを問題視している<sup>13</sup>。したがって説得力のある基準を立て上げることが重要なのである<sup>14</sup>。

マクロ集中構造は、一語や一文によって形成されるマイクロ集中構造と異なり、物語ユニットごとに配置される。多くの学者たちは、マクロ集中構造が聖書の中で用いられているという多くの証拠を見ているが<sup>15</sup>、S・E・ポターとJ・T・

<sup>11</sup> Thomson, *Chiasmus*, 22; Cf. John Ashton, *Studying John: Approaches to the Fourth Gospel*. (Oxford: Clarendon Press, 1994), 153; George Mlakuzhyil, *The Christocentric Literary Structure of the Fourth Gospel*. (Rome: Editrice Pontificio Istituto Biblico, 1987), 238-241.

<sup>12</sup> Peter F. Ellis, *The Genius of John* (Collegeville, Minn.: The Liturgical Press, 1984), 13-15.

<sup>13</sup> Brouwer, *Literary*, 155-156.

<sup>14</sup> Thomson, *Chiasmus*, 22-34; Brouwer, *Literary*, 30, 38-42. Cf. Alan Culpepper, "The Pivot of John's Prologue," *NTS* 27 (1980-1981) 7-8; David J. Clark, "Criteria for Identifying Chiasm," *Linguistica Biblica* 5 (1975) 63-72.

ルンドがマイクロ集中構造を確認するために以下のような要素を発表した。(1)集中構造の中心と見られる部分は、常に転換点である。

(2) 思想は中心で展開し、前の流れに登場した議論と主題の発展として、しばしば正反対の考えへと転換する。

(3) 中心を軸とした反対側に一致するアイデアが配置される。

(4) あるアイデアが対極の場所と中心に、再び配置される。

(5) 中心に向かって、ある言葉が引き寄せられる。

(6) 文章の枠によって、より大きなユニットが頻繁に紹介され、また結論付けられる。

(7) 集中構造の発展は頻繁に直線的な発展を伴って散りばめられる。

Lund, *Chiasmus*, 40-41; cf. Brouwer, *Literary*, 30.

<sup>15</sup> E.g., Gary M. Burge, *John The NIV Application Commentary* (Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 2000), 488; Graig S. Keener, *The Gospel of John: A Commentary/Volume One*. (Peabody, Massachusetts: Hendrickson, 2003), 895; Charles H. Talbert, *Reading John: A Literary and Theological Commentary on the Fourth Gospel and the Johannine Epistles*. (N.Y.: The Crossroad Publishing



リードは、ルンドが主張したミクロ集中構造的基準を適用することの難しさを指摘し、マクロ集中構造的見極める、より客観的な基準の必要性を主張した<sup>16</sup>。そこでクレイグ・ブロンバーグによって提案されたマクロ集中構造的見極める九つの基準を紹介する<sup>17</sup>。

マクロ集中構造的基準 (C・ブロンバーグ)	
基準 1	集中構造的と思われる箇所、別の文学的発展が見られる場合はマクロ集中構造的としては問題であると見なされる。 解説) 集中構造的として成り立つかを確認するときに、テキストがより明確な区分で分断されているか、別の明らかな文学構造の一部となっている場合、その箇所は疑問視される。
基準 2	集中構造的の両側に明らかな並行法が成り立っていない限りはならない。
基準 3	集中構造的の両側に明示された言葉や概念によって並行法が成り立っていない限りはならない。 解説) 並行する言葉や概念は対になる文章の区分けを最も顕著に特徴付けるものであるべきである。
基準 4	セクシヨーン間の並行法は明確で意義深さのあるものでなくてはならない。並行する言葉は中心的な用語とイメージを含まなくてはならない。主要でない言葉や些細な表現では成り立たない。
基準 5	並行する言葉や概念はその集中構造的の中で、どこにでも頻繁に見出しうる用語や概念であってはならない。
基準 6	対になる箇所、複数の一致するセット、複数の並行する要素があることが望ましい。
基準 7	マクロ集中構造的のフレームはテキストの自然な区分で分けられるべきである。文書全体を別の構造的で理解する者たちによっても、

Company, 1992), 237.

<sup>16</sup> Stanley E. Porter, and Jeffrey T. Reed. "Philippians As a Macro-Chiasm and Its Exegetical Significance," *New Testament Studies* 44 (1998) 221; cf. Brouwer, *Literary*, 35.

<sup>17</sup> Craig Blomberg. "The Structure of 2 Corinthians 1-7," *Criswell Theological Review* 4 (1989): 5-8. Brouwer, *Literary*, 40-41, 96-154.

その区分は自然であると認められるほうがよい。

基準 8	集中構造的の中心は神学的、また倫理的な視点で、意義深く価値ある箇所ではなくてはならない。
基準 9	集中構造的のフレームにおいて、断絶はできるだけ避けられるべきである。これまで議論されてきたことによると、並行する片方の順番が対になる部分で構造上、反転している箇所がある場合、実質その仮説を弱めることとなる。

本論文では暫定的な基準として用いる。文学的性質と構造枠 (基準 1, 7, 9)、並行する形状の評価 (基準 2-6)、中心軸の意義 (基準 8) というように順序を再構成して用いることにする。

### III 第一過越物語の集中構造

#### 1) 第一過越物語の枠

ここでは第四福音書の第一過越物語 (1:19-4:54) の構造を研究していく。直接、過越の祭りを背景としていないテキストも含まれているが、過越祭への巡礼をめぐるサイクルとして理解できる (2:13, 23, 4:3-4, 45)。二つのカナを舞台とする物語 (2:1-12, 4:46-54) が、第一過越物語における囲い込みとして機能している<sup>18</sup>。

第一カナ物語 (2:1-12)	第二カナ物語 (4:46-54)
[-----第一過越物語-----]	

フランシス・モローニーは2章から4章の文章ユニットを「カナからカナへ」と呼び、二つのカナ物語を囲い込みとして理解した<sup>19</sup>。この研究では第一過越

<sup>18</sup> Mlakuzhyil, *Christcentric*, 171. Burge, *John*, 151.

<sup>19</sup> Francis J. Moloney, "From Cana to Cana (John 2:1-4:45) and the Fourth Evangelist's Concept of Correct (and Incorrect) Faith," *Studia Biblica 1978: II Paper the Gospels: Sixth International Congress on Biblical Studies* (Sheffield, England: Sheffield, 1980), 185-213; Moloney, *John*, 63-64. Cf. Mlakuzhyil, *Christcentric*, 239; Brown, *Gospel*, 195; Burge, *John*, 64.